

人とへびとの微妙な間隔

里草会顧問 福井正樹

田植えが終わって梅雨が明けるころだった。祖母が「もう昼だからおじさんに帰るよう
に伝えて来い」と言われて家を飛び出した。荷車の通る道は遠回りになるので路地から続
く田んぼの中の野良道を跳ぶようにして駆けて行った。両側の田植の終わった水田は、ま
だ畦塗した後が乾ききってないので踏むと足が取られてしまう。野良道は両方の水田の耕
作者がぎりぎりまで削って畦を塗るので微妙な幅しか残っていない。

その細い歩くだけの道を大股で跳びあがりながら行くと、蛇が長々とその道に横たわっ
て日向ぼっこしていた。十分気温が上がっていないので、体を陽にさらして温めていたの
であろう。勢いがついているのでそのへびを飛び越して足をついたらその先にもまたへび
が長々と横たわっている。さらに思い切って飛び越したらまたその先にへびが横たわっ
ていた。

ゆっくり歩いているのなら地面の振動などで人の来るのを察してへびは逃げるのだらう
し私も逃げるのを見守る。田圃道に入って私が勢いよく進んでいったので、蛇は飛び越え
られてあわてて動き出すのだが緩慢である。陽射しを受けて何匹ものへびが、ほとんど乾
いた畦塗したところに頭を置いて並んで温まっているのを跳びこしていったことが、いま
でも体感として残っている。

へびと農家との距離感は微妙である。突然へびに出会ったりするとあまり気持ちの良い
ものではない。だからと言ってへびを極端に拒否したり追い払うのでもない。近くの家で
真夏の昼下がり、ガラガラと照りつける太陽の下で、大きなへびが倉の土壁の角を上から
慎重に降りてくるのを何人もが見守っていた。家の人たちも追い払おうとしているのでは
なく、予想以上に大きなへびなのでただ眺めているだけだ。どの家にも「やしきまわり」
という大きなへびが一匹住み着いていて、その家を守っているのだと言われていた。蛇が
守り神として許容されているのである。

確かに屋根裏などに入りこんだへびが、ネズミなどを採って食べることもあるのだらう。
天井裏をぞろぞろと微妙な音を立てて這いずってゆくのを聞いたことがあるが、そう気持
ちの良いものでもない。へびは鶏の卵を飲むと、庇のような高い所に登ってわざと落ちて
卵を潰すのだと言われていた。卵かネズミかわからないが、のどのあたりの膨らんでいる
大きなへびを見たこともある。少なくとも自分の家の周りでへびを殺したりいじめたりは
しなかった。

小学生の頃は、怖さや気味悪さを感じるのだが、それに俺は負けないぞという強がりも
見せたかったのだらう。夏の昼下がりに川遊びから帰る時へびを見つけると、そのしっぽ
を掴んでみんなに見せてから振り回した男の子がいた。掴んだままだと鎌首をもたげて手
の方に頭を向けてくるが、振り回すと伸びてしまう。その子が力いっぱい頭の上で振り回
すと予想以上に長くなって、嫌がって遠くで眺めていた女の子の肩をかすめた。触ったか

どうかという程度だったが、予想以上に血が流れて驚いたことがある。

村の男の子三人で、村はずれのとても古い屋敷跡の石垣からへびを引きずり出して片っ端から殺したことがあった。何も考えているわけではなく申し合わせたのでもないが、夢中でへびを追い回し逃げるのをしっぽを掴んで引きずり出した。石垣に体をほとんど入れてしまったのを三人で力を合わせて引っ張ったら尻尾が切れてしまった。今でも思い出すのだが、なぜみんながそんなことに夢中になって残虐な行為に酔っていたのかわからない。へびに対する屈折した感情にとらわれていたのだろうか。それに子供の集団的攻撃性がへびに向かって発散したのだろうか。殺したへびを広い道路に長々と並べて妙な達成感に満足していた。自転車で通りがかった人は驚いたことだろう。

母とお墓参りに行った帰りに、刈り取られた稲株にへびが巻きついているのを見た。カエルの足を胴で締め付けているがカエルは必死に逃げようと飛び跳ねている。へびが頭をカエルに近づけると胴も動くのでカエルも進むことができる。へびはなかなかカエルを呑み込むことができない。助けてやろうかと母に言ったら、ほっといたらいいといったのでそのままにした。見ている限りではへびの頭が近づく分だけカエルが遠ざかってなかなか届かなかった。鳥獣戯画のような場面だった。

またこれは今の畑で見たことなのだが、蛇がずっと伸びあがって体を地面に叩きつけるように倒れる。倒れた時体じゅうをくねらせてまた頭を精一杯伸ばし、地面に転がっている。まさにのた打ち回るとい言葉そのものの行為をしているのだ。しかも2時間以上はてしなく繰り返している。通りかかった人も一緒に見ていたのだが、何のための行動なのか全くわからない。しかしのた打ち回るとい言葉そのものを体現しているのである。今なら映像を残しただろうがその時はただ見ているだけで終わった。その後爬虫類の専門家に質問したのだが、その先生は見たことが無いということだった。

これらは皆アオダイショウという種類だったと思う。他のへびより大きくなり、人家のそばでもよく見かける種類だ。中学生の時にへびを飼育しようとして木の箱に土などを入れて何種類かのへびを捕まえてきたことがあったが、間もなく死んでしまった。飼うのは難しいものだった。

日本の神道は森の宗教と言われるそうだが、自然崇拝でへびやキツネも人々を護ってくれる神の一種だと考えるらしい。三輪神社にも白へびの伝説があるし、岩国の錦帯橋の近くでは、たくさんの白へびが飼われているのを見た。へびというものは何となく忌避感を持つものだけれど、ながい村の生活の中では人を護ってくれる呪術性も認めていたのだろう。狐も全国の稲荷神社に祭られている。

ついでに思いだしたのだが、夜に向かいの山裾を青白い火が五つくらい小さな弧を描いて行き来しているのを見た。初夏の蒸し暑い晩で、寝る前に小便をしようと祖父と連れ立って眺めていたので怖い感じはしなかった。まるで青白い火（発光菌の付いた枝？）をかざしてびよんびよんびよんと右に行くのがあると反対に跳んで行くのもある。祖父は「キツネが遊んでおるのじゃわい」と言ったが幻想的な情景であった。